

アメリカ大学図書館の旅② ーコロンビア大学ほかー

附属図書館情報サービス課参考調査掛 後 藤 慶 太

前は、ハーバード大学をご紹介しましたが、本稿では、コロンビア大学とNCC、CEALという2つの研究会議についてご紹介します。

1. コロンビア大学

<http://www.columbia.edu/>

コロンビア大学は、1754年、イギリス国王ジョージ2世の勅許によりキングス・カレッジ (King's College) として創設されました。数度の移転を経て、現在のニューヨーク市、マンハッタンの北西部、モーニングサイド・ハイツに落ち着いたのが1897年のことで、その間に、キングス・カレッジからコロンビア大学に名称も改められました。昨年秋、日本人の某人気歌手が飛び級で入学したということもあって、日本では、コロンビア大学という名前は一般にもかなり浸透しているのではないのでしょうか。

コロンビア大学の図書館は併せて20以上あり、蔵書数は700万冊を越え、全米で第8位ということです。訪問の際は、C.V.スター東アジア図書館 (C. V. Starr East Asian Library) の館長であるAmy V. Heinrichさんにご説明・ご案内いただきました。また、訪問依頼の段階で、日本研究担当のライブラリアン三木保子さんにお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

① C.V.スター東アジア図書館

<http://www.columbia.edu/cu/lweb/indiv/eastasian/>

ハーバード大学イェンチン図書館と同様、東アジアコレクションでは全米屈指の図書館で、東アジア以外の地域では5本の指に入るそうです。70万冊に迫る蔵書を持っており、雑誌も4,000タイトル以上あります。

まずは館内をご案内いただきました。天井が高く、重厚な佇まいはいかにもアメリカの図書館

らしく、思わず唸ってしまいましたが、お世辞にもきれいとは言えませんし、スペース的にも十分とは思えません。端末などもどうにか置き場所を見つけたという感じです。特に、書庫の狭隘さ・使いにくさについてはAmyさんも嘆いておられました。



C.V.スター東アジア図書館

目録の遡及入力は、90% (2000年3月時点。現在、ホームページを見ると95%になっています) まで済み、2002年にはすべて終了するだろうということです。ちなみに、コロンビア大学図書館の検索システムはCLIO (Columbia Libraries Information Online) と言い、基本的には、1981年以降のデータが検索できます。

ところで、この図書館はノーチェックで誰でも入れるようになっています。しかし、Amyさんの話によれば、学外者の利用が増え、コロンビアの学生達に十分に使ってもらえないような状況になっているらしく、遠からず、IDがなければ入れないような仕組みにしたいとのことでした。ある旅行案内書には、“日本の主な新聞や雑誌が置いてあり、一般にも開放されているので、日本の情報が恋しくなったらここに来るといい”というアドバイスが書いてありますが、はたして今後どうなるのでしょうか。(まったくの余談です。帰国後、顔なじみの招聘外国人学者の方が来られました。そして、私

が東アジア図書館を訪問したことを聞き、とても喜ばれました。彼は、コロンビア大学で学位を取得し、在学中、東アジア図書館をよく利用していたということでした。しばし、2人で盛り上がったことは言うまでもありません。世界は広いような、狭いような…。)

② バトラー図書館

<http://www.columbia.edu/cu/lweb/indiv/butler/>
歴史、文学、宗教など人文科学系を中心とした200万冊の蔵書を誇るコロンビア大学最大の、いわば中央館的な存在の図書館です。その偉容はハーバード大学ワイドナー図書館を彷彿とさせ、同じように古代ギリシアの宮殿を連想させる巨大な石柱が何本も立ち並ぶ建物です。Standard Oil社の経営者にして慈善家のEdward S. Harknessの寄付により1934年に、“South Hall”として開館しましたが、1946年に、40年以上の長きにわたってコロンビア大学の学長職にあったNicholas Murray Butlerに因んで改名されました。



バトラー図書館

内部は、天井の高い閲覧室がいくつもあり、かなりの広さです。そして、CCNMTL（後述）などバトラー図書館のサービスの範疇にない部署がいくつか入っていて、あたかも複合施設のようになっています。そして、老朽化した設備の更新やネットワーク化への対応を含め、1995年から大規模な修繕工事が始まっています。

館内の施設で感嘆したのは、やはり“Reserves”（指定図書）でした。どんな資料がReservesにあるかは、ホームページで公開されています。

さて、私にはどうしても知っておきたいことがありました。コロンビア大学を訪問したかった一番の理由と言っても過言ではありません。図書館学を学ぶとたいてい、“デューイ（Melvil Dewey）が世界で初めてコロンビア大学に図書館員養成のための図書館学校を開いた”ということを知ります。これが先般の不況下、閉鎖されたという報に接しました。それからしばらく経ちますが、その後、この図書館学校がどうなったのか気になっていたので、ぜひお聞きしたいとメールでもお伝えしていました。Amyさんは私を305番の部屋の前に連れて行き、「図書館学校は以前ここにありました」とおっしゃいました。今は、Electronic Text Serviceという部署になっています。「なぜ再開されないのでしょうか？」とお尋ねすると、「なぜだか…。私にもわからない」とお答えになりました。

③ Columbia Center for New Media Teaching and Learning (CCNMTL)

<http://ccnmtl.columbia.edu/>

ここは、バトラー図書館の204番の部屋にありますが、図書館に付属するものではなく、独立した部署です。ニューメディアとデジタル技術をコロンビア大学の教育に積極的に活用することによって、これまでにない授業の形態や新しい教材を創り出すサポートをします。教員達への最新技術の紹介やソフトウェアの講習、技術を活用した授業プランおよび教材作成の相談・援助、さまざまなワークショップの開催、そしてそれらを可能にするための数多くのツール（PC、スキャナー、プリンター、ソフトウェア、メディア作成機器等）と充実したスタッフが用意されています。

ちょうどこの部屋にいたスタッフにいくつかデモを見せていただきました。例えば、2枚の絵画を比較するために、Web上で2つの画面を並べて開いて、詳細に比較・検討することができます。必要ならば、動画や音声をクリックさせ、関連するものを参照したり、解説やポイン

トを聴いたりすることもできます。また、現物や美術書のようなものであれば、多くの学生が同時に観察することはできませんが、web教材ならそれも可能になります。私が、「これは先生にとっても、学生にとってもすばらしいシステムだと思います」と彼女に言うと、「本当？ 私たちもとても良いシステムだと思うわ」と笑顔で答えられました。自分たちの仕事が、コロンビア大学の教育にいかに関与しているかという自信に満ち溢れた笑顔に見えました。（ホームページで、授業教材のサンプルを見ることができます。）



CCNMTL内部の様子

2. NCC/CEAL

研修期間の後半には、NCC（North American Coordinating Council on Japanese Library Resources；<http://www.lib.duke.edu/ias/eac/ncc/>）とCEAL（Council on East Asian Libraries；<http://staff.washington.edu/rrbritt/ceal/>）という研究会議に参加しました。紙幅に余裕もないので詳細はホームページをご覧くださいとして、私は今回、CEALの分科会Committee on Japanese Materialsにて、“Scanned Image Data of Rare Materials for the Kyoto University Digital Library”と題する発表を行うという幸運に恵まれました。これは、ハーバード大学の山田さんからの提案をお受けする形で実現したのですが、実際の発表に当たっては、原稿の英訳から当日の設定まで委員長森本さん（University of California Berkeley）に大変お世話になりました。4本の発表や委員会報告などが矢継ぎ早に行われ、質疑応答の時

間もわずかだったため、私の発表に対する質問や感想をいただくことができず、その点が心残りでした。京大電子図書館は、海外における日本研究にとって有用なものなののでしょうか。当初抱いていた疑問は未だ疑問のまま残さざるを得ません。

3. おわりに

私にとっては初めてのアメリカ旅行、しかも一人旅ということでもとても不安でしたが、過ぎてしまえば、あっという間の2週間でした。ハーバードやコロンビア以外にも、UCSD（University of California San Diego）やUCLA（University of California Los Angeles）の図書館、ボストン公共図書館（Boston Public Library）、ニューヨーク公共図書館（New York Public Library）なども訪問でき、それぞれに深い感銘を受けました。それから、NCCにおける活発な議論—ILL、国際協力、著作権、人材育成等いくつかのトピックごとに、今後10年間で何に重点を置いて取り組むかということについて全員で意見を出し合い、一定の方向を決めていく姿を目の当たりにして、今まで単純にアメリカの図書館やライブラリアンを羨ましく思ってきた自分が恥ずかしくなりました。専門職としての地位は一日にして成らず、また永久に不滅のものでもないのです。（「ライブラリアンは専門職とは言え、ランクは低い方で、給料もそれほど高くありません」とは山田さんの弁です。）

軽々に日米を比較するようなことはしたくありませんが、それでも歴然とした差は存在するように感じます。京大図書館に一番足りないものは…？何のために、誰のために、どんな図書館サービスを、どのようなポリシーのもとに展開するかという根本的な目的・目標、構想、方向性や使命（mission）でしょう。人員は削減され、予算は縮小され、疲れて余裕のない図書館員と先人が残してくれた古い資料等の財産でどうにか食いつないでいるように見えます。

「百聞は一見にしかず」と言いますが、実際

にアメリカに行ってみて本当に貴重な経験をさせていただきましたし、考えさせられるところもいろいろありました。最後になりましたが、

お世話いただいたみなさまに改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(ごとう けいた)

附属図書館に『京都古地図コレクション』の寄贈

このほど附属図書館では、京都市上京区在住の大塚隆氏から、『京都古地図コレクション』の寄贈を受けた。寄贈を受けた古地図は、江戸期から近代に至る京都に関する地図の唯一といえる体系的コレクションである。総数は470余枚に及び、そのうち280枚は江戸期及び明治期前半に作製されたものである。

コレクションの中には、江戸期に印刷された現存する本邦最古の京都市街図である『都記』（みやこのき）、通称『寛永平安町古圖』（刊年、版元不明）が含まれている。蔵書印からこれまでに何人かの所有者の手を経たことがわかるが、中には木村兼葭堂・富岡鉄斎の蔵書印も見える。これは重要文化財にも匹敵するものと言われている。江戸期京都図の版元を代表する林吉永・竹原好兵衛など主要な版をほとんど網羅している。

また、同じ版でも手書きで彩色されたもの、彩色印刷されたものがあるなど、比較して見ると興味深い地図が沢山ある。町中を子細に眺めると、正面通りの東詰に大仏があったことが分かるほか、現在に残る通りの名前があり、改め

て京都の長い歴史を感じさせる。周辺に目を転ずると、三井寺を表すためか琵琶湖が描かれている地図もある。

これらは、人文・社会科学分野のみならず、広範囲の研究者にとって第一級の学術研究資料であり、今後の研究者による活用が大いに期待される場所である。

このコレクションは、金田章裕文学研究科教授の永年にわたる同コレクションに関する研究を縁として寄贈に至ったものであり、寄贈者の大塚隆氏に対して、平成12年12月19日（火）総長室において、佐々木丞平附属図書館長、金田章裕文学研究科教授、熊谷俊夫附属図書館事務部長等の出席のもと、長尾真総長から感謝状の贈呈が行われた。

附属図書館ではこの古地図を『大塚京都図コレクション』として貴重図書に指定し、整理・保存していくだけでなく、図録の作成、公開展示会の開催のほか、現在推進している「電子図書館システム」によるネットワーク上でも公開することにより、広く利用していただくことも計画している。

